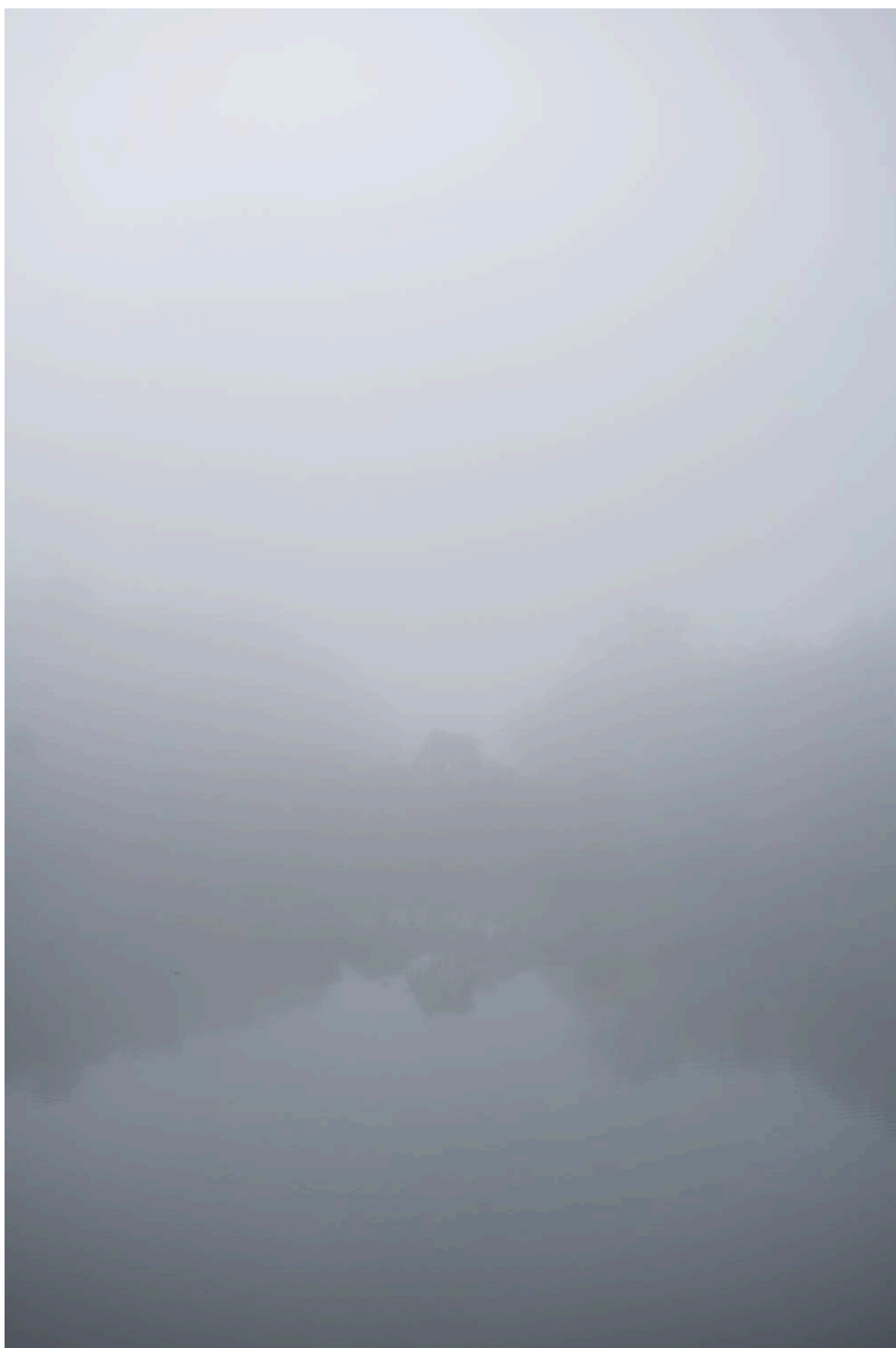


文化村クリエイションvol.2／相模友士郎／クリエイションと上演のための覚え書き

「舟を漕ぐ」



2022.12.28

2022.12.25『ブラックホールズ』終演しました。



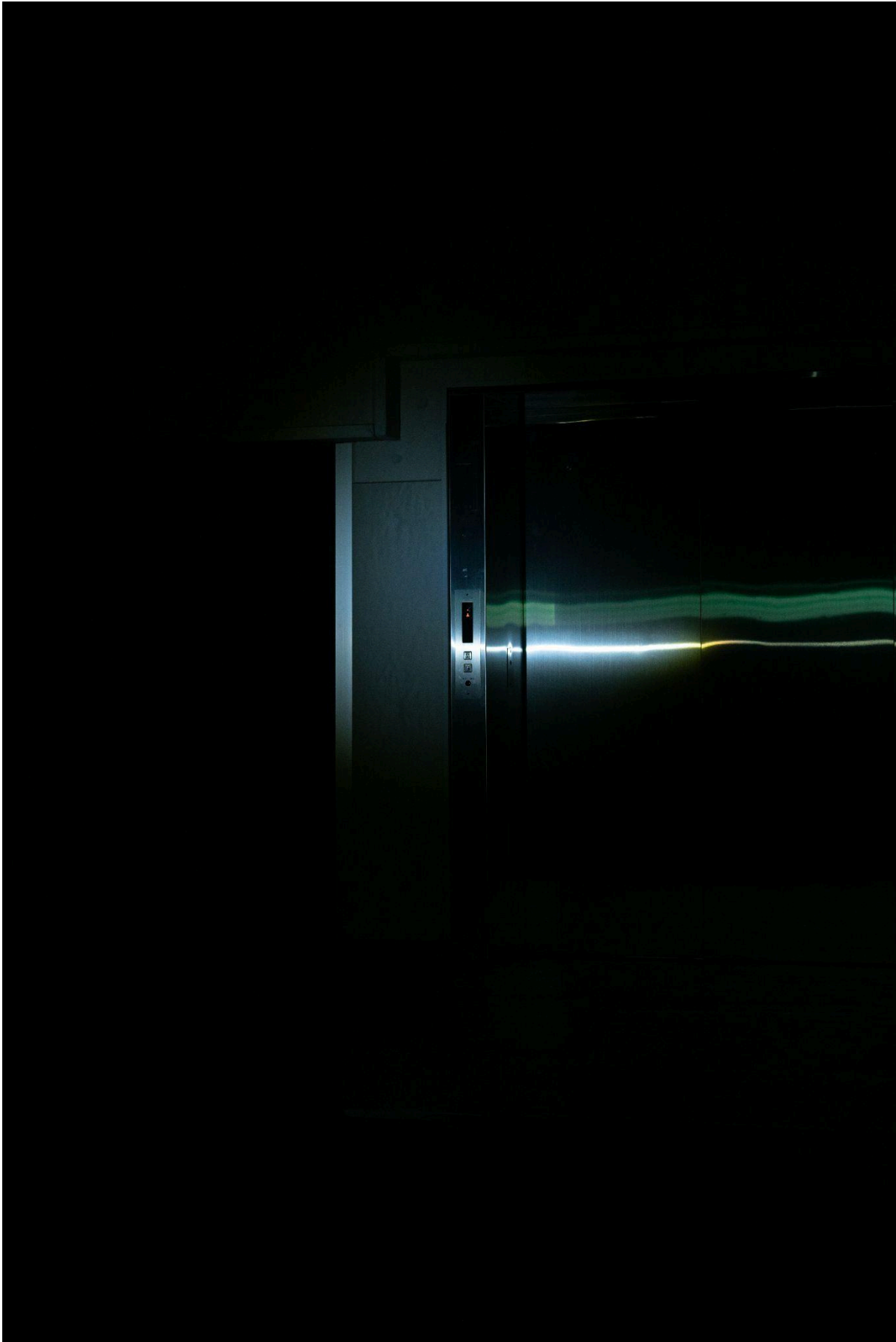




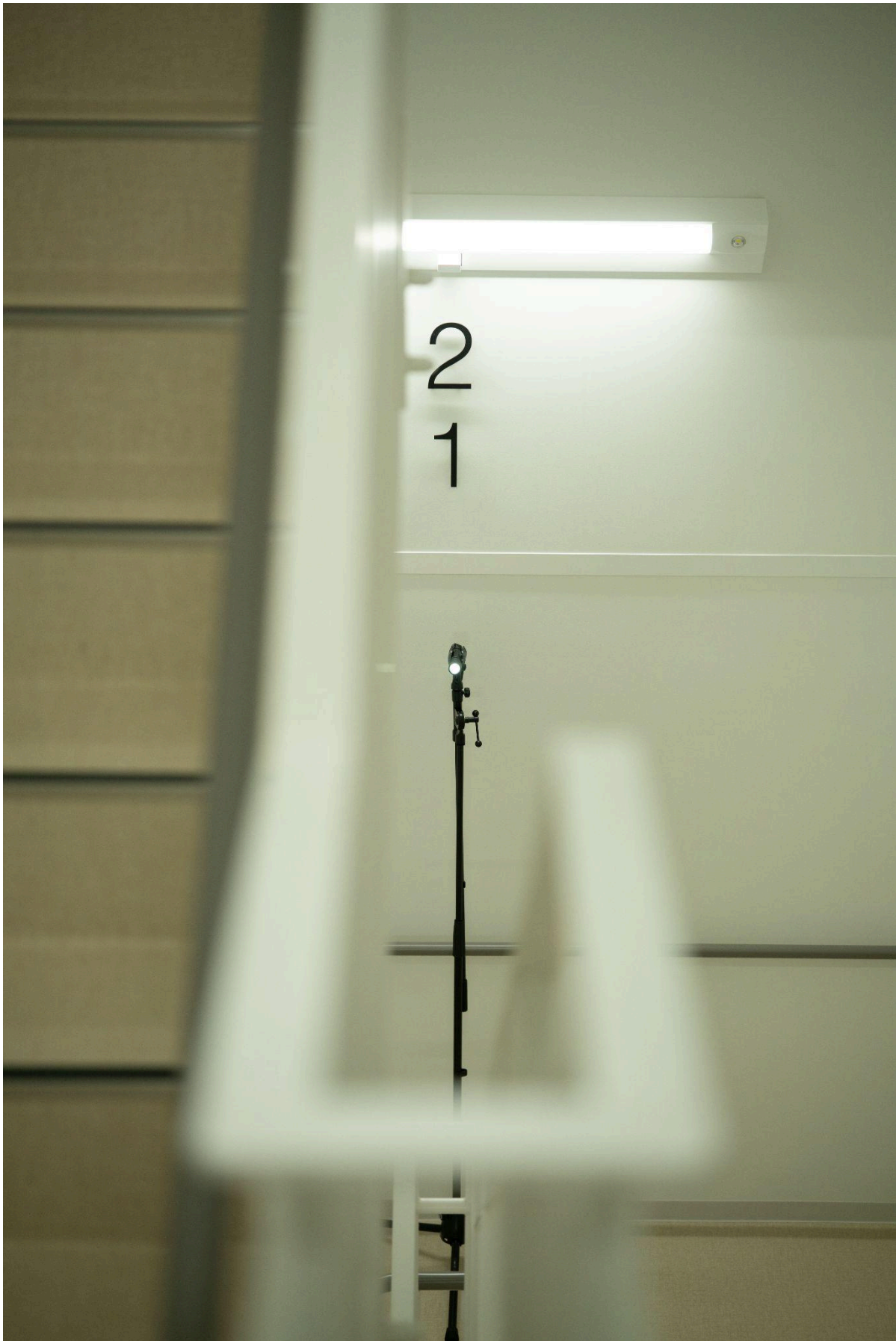
















2022.12.24

二日目終わり。







2022.12.23

初日終わり。



2022.12.23/1:25

ザッと雪が降って今は星が出ている。

2022.12.17

何を救うか。何が救われるのか。

文化村クリエイションvol.2／相模友士郎

『ブラックホールズ』

2022年12月23日(金)17:30～、24日(土)14:30～／17:30～、25日(日)11:00～／14:30～

なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟ホール 他

—

構成・演出 | 相模友士郎

ライティングデザイン | 高原文江 サウンドデザイン | 荒木優光

舞台監督 | 北方こだち 制作 | 遠山きなり

—

各回10名限定

2022.12.13

場所細胞

移動することで活性化される。

睡眠不足

2022.12.12

経験の筋道を明確に提示すること。向かう方角を設定することでその経験の深度を獲得すること。

再訪した行燈山古墳はやはりとても良かった。







池の手前で空間が断ち切れていて、そのことによって以降の空間がすべてこことは違う空間として意識される。
切断することによって生まれる空間。
私とは別の遠くのもの繋がるための装置として機能している。
体験のグラデーション。ツアー。

2022.12.11

Re劇場実験。一進一退。
まだまだ、時間が見えない。
眠る事、遠くにつながる事。遠い光、か。

2022.12.10

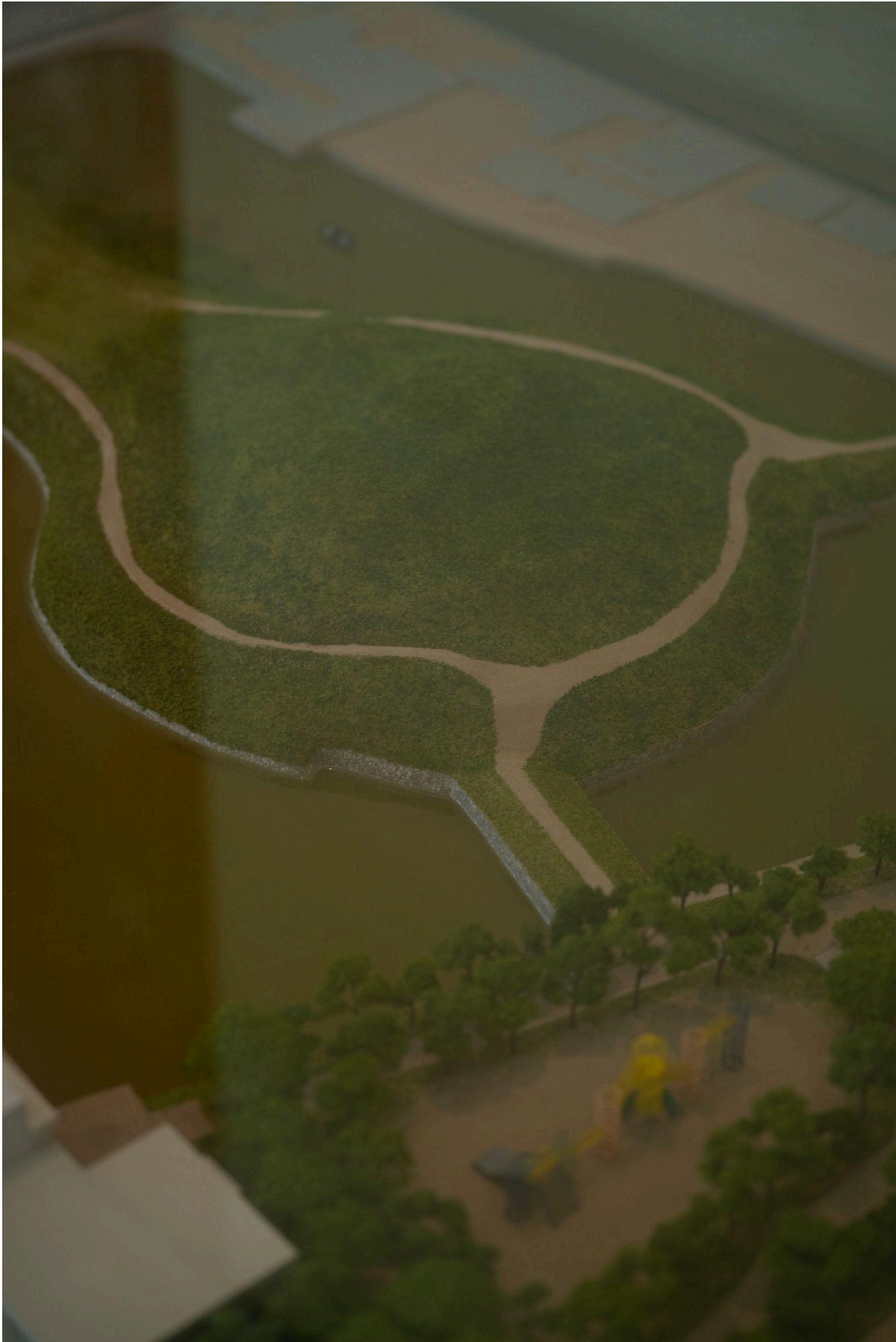
今日はスタジオには行かず、いくつか古墳を巡る。

The photograph shows the exterior of a modern building with a dark, flat roof. A large, light-colored rectangular sign is mounted on the wall, featuring the title '天理市立黒塚古墳展示館' in bold black characters. To the right of the sign is a circular black light fixture. Below the sign is a low wall made of irregular, light-colored stones. A shadow of a tree branch is cast onto the stone wall. In the foreground, there is a paved area and some dry leaves on the ground. Bare tree branches are visible in the background against a pale sky.

天理市立黒塚古墳展示館

定礎
西暦2005







黒塚古墳





箸墓古墳







ホケノ山古墳





檜原神社

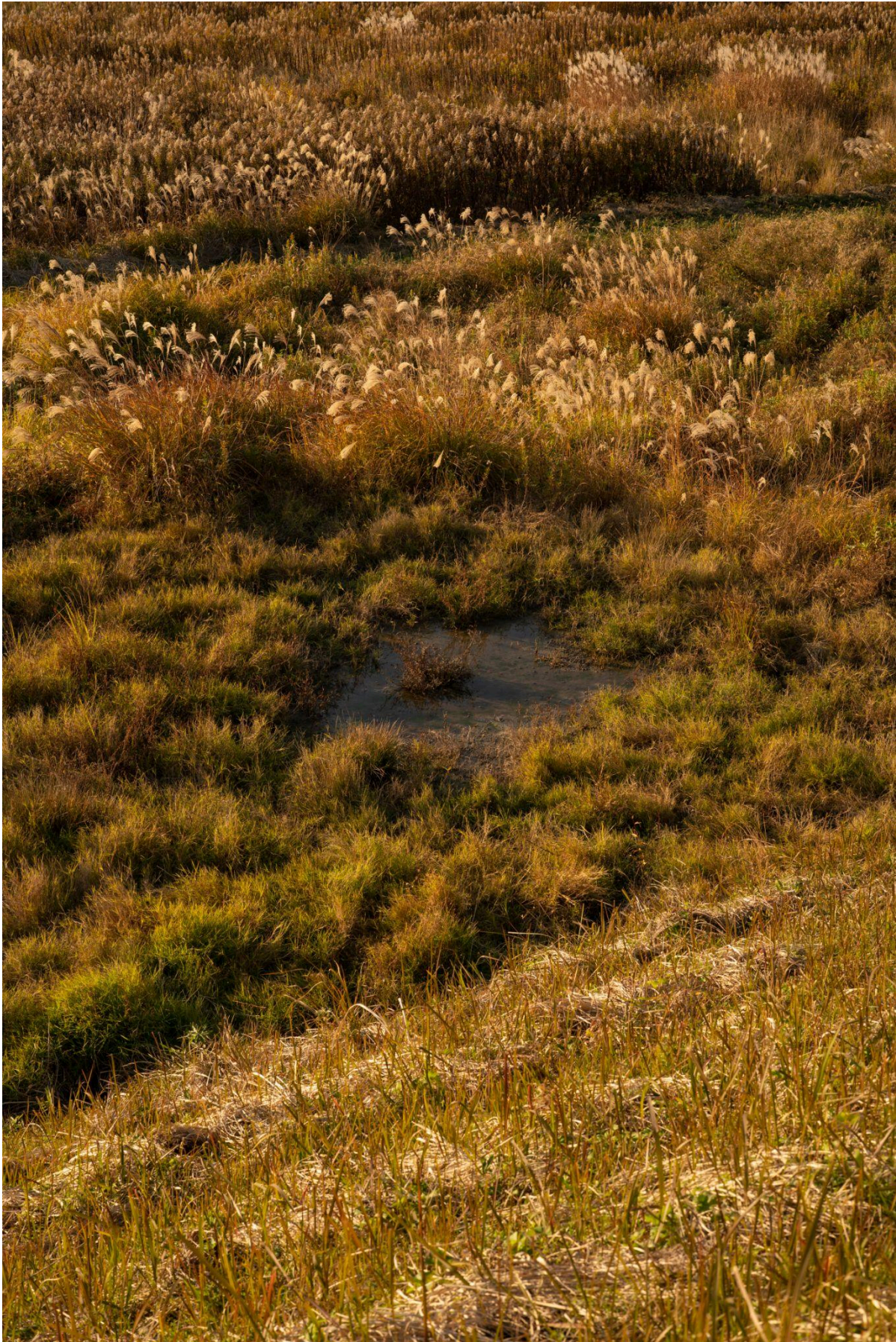






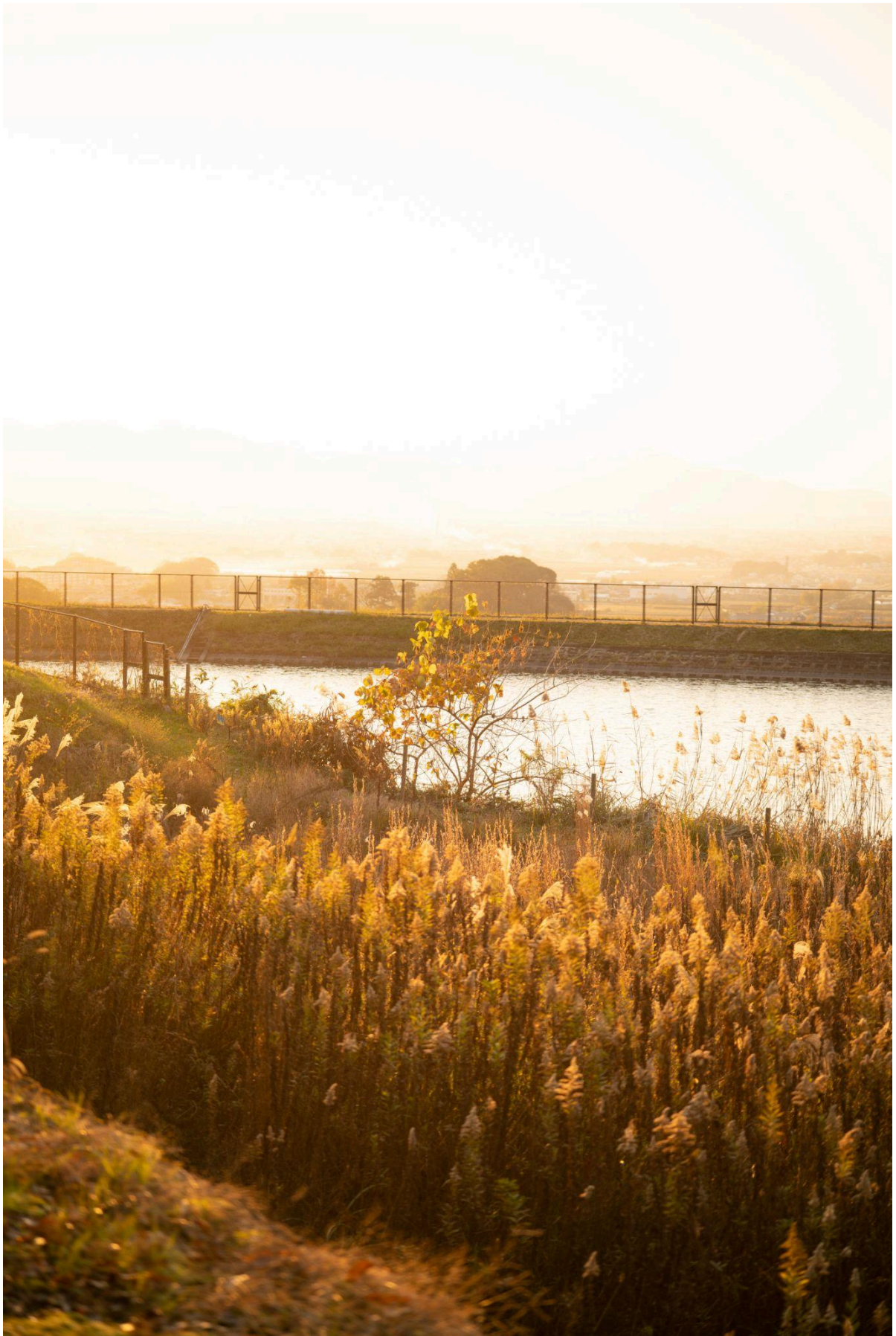
渋谷向山古墳





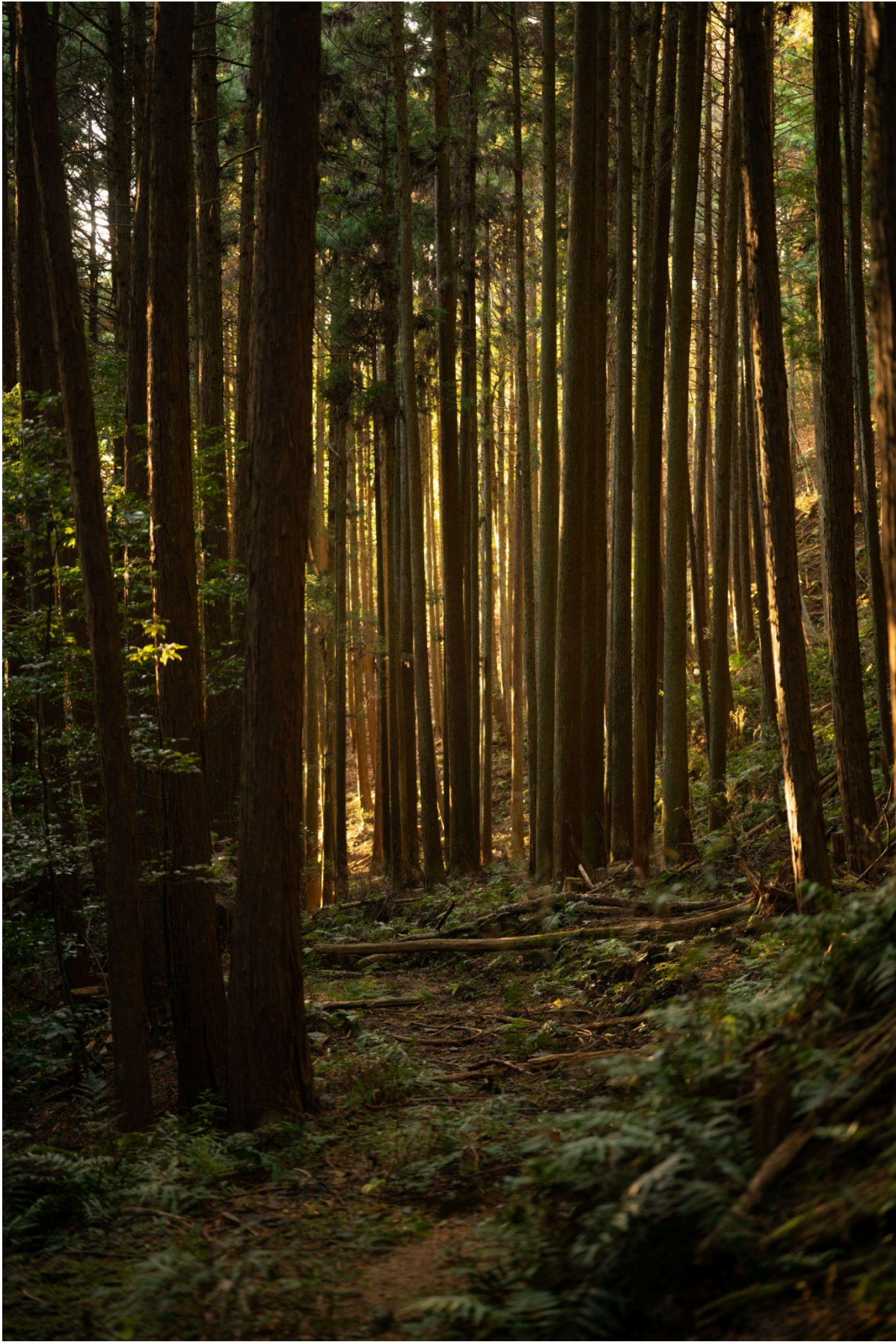


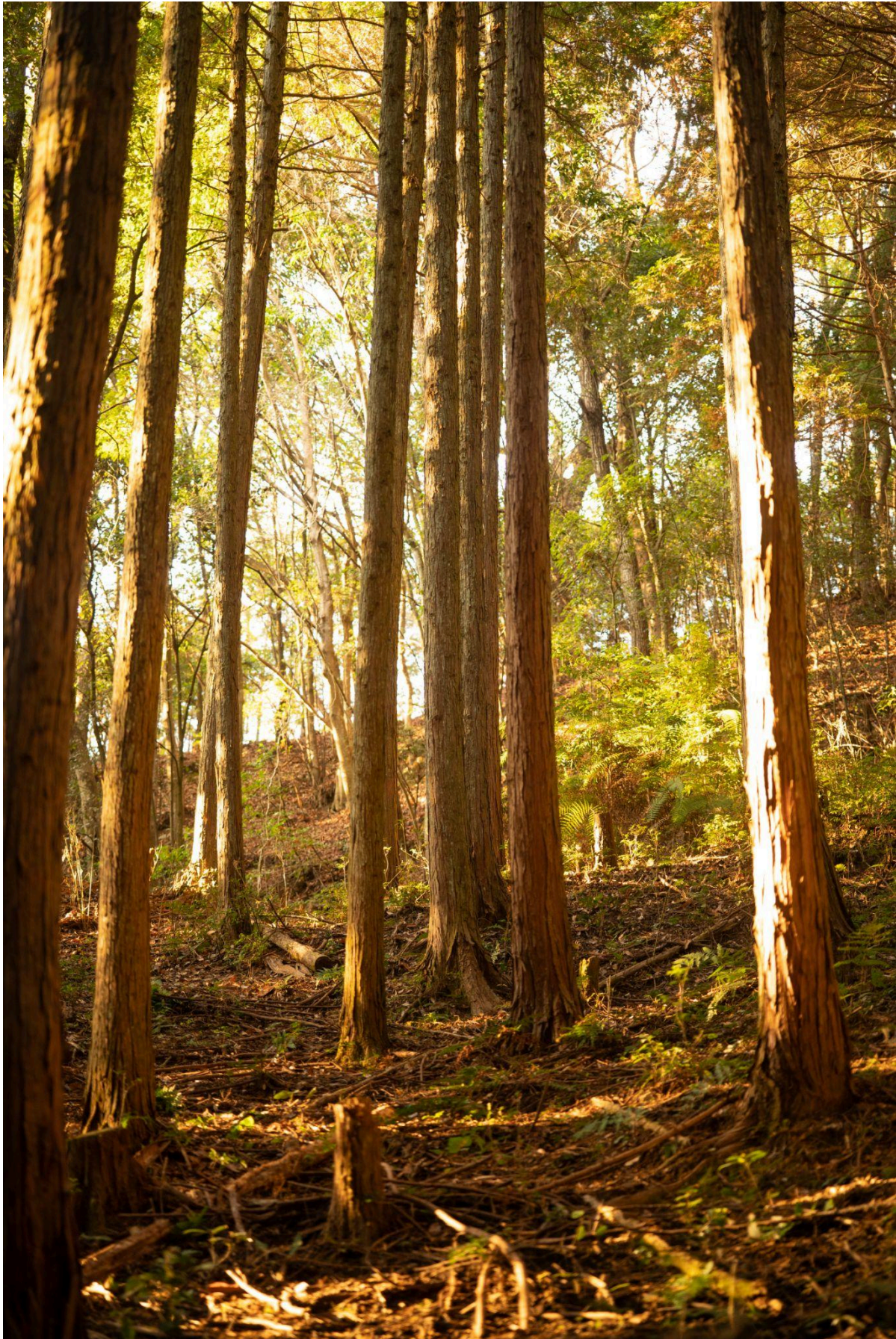




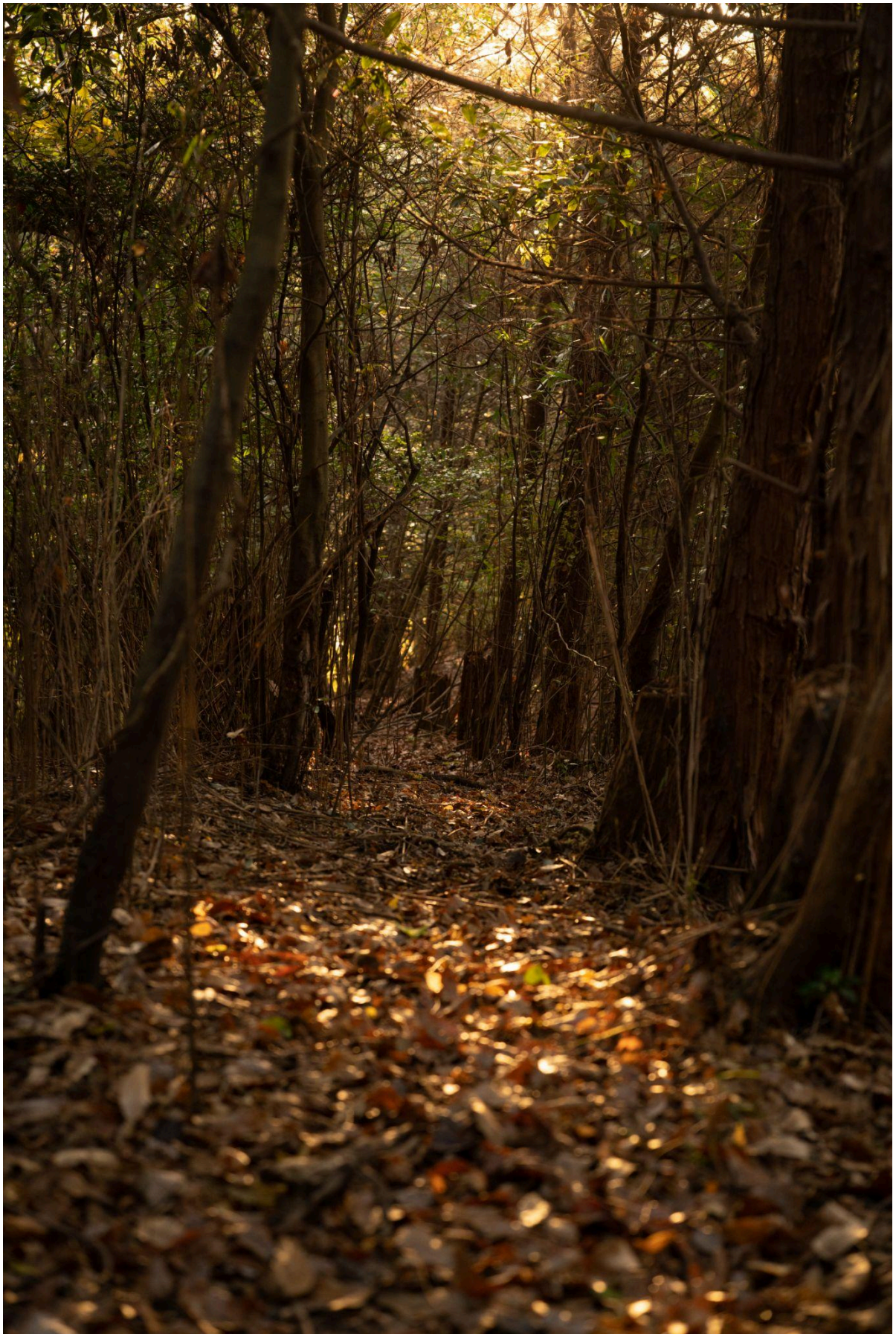
鎌砥池



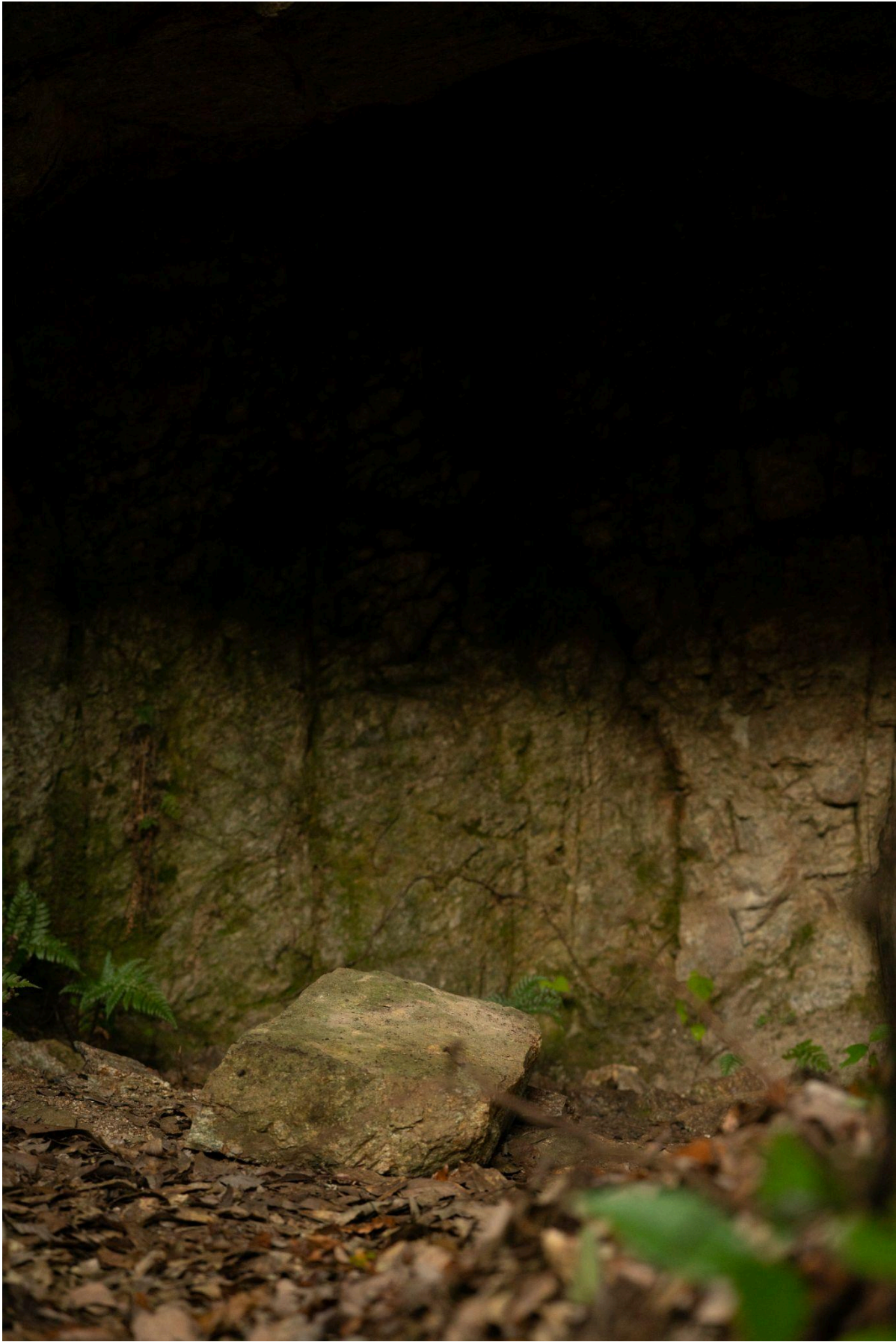




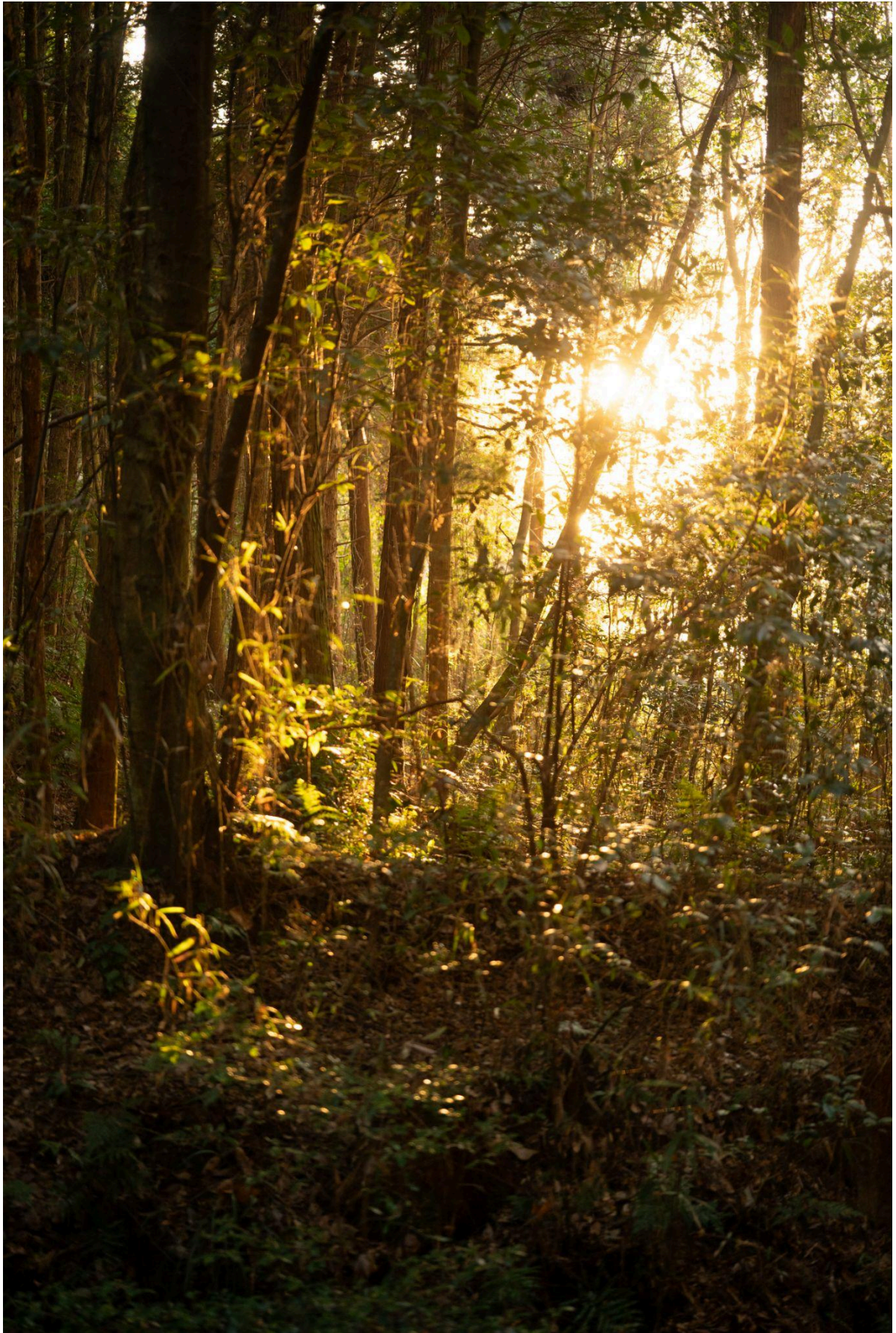












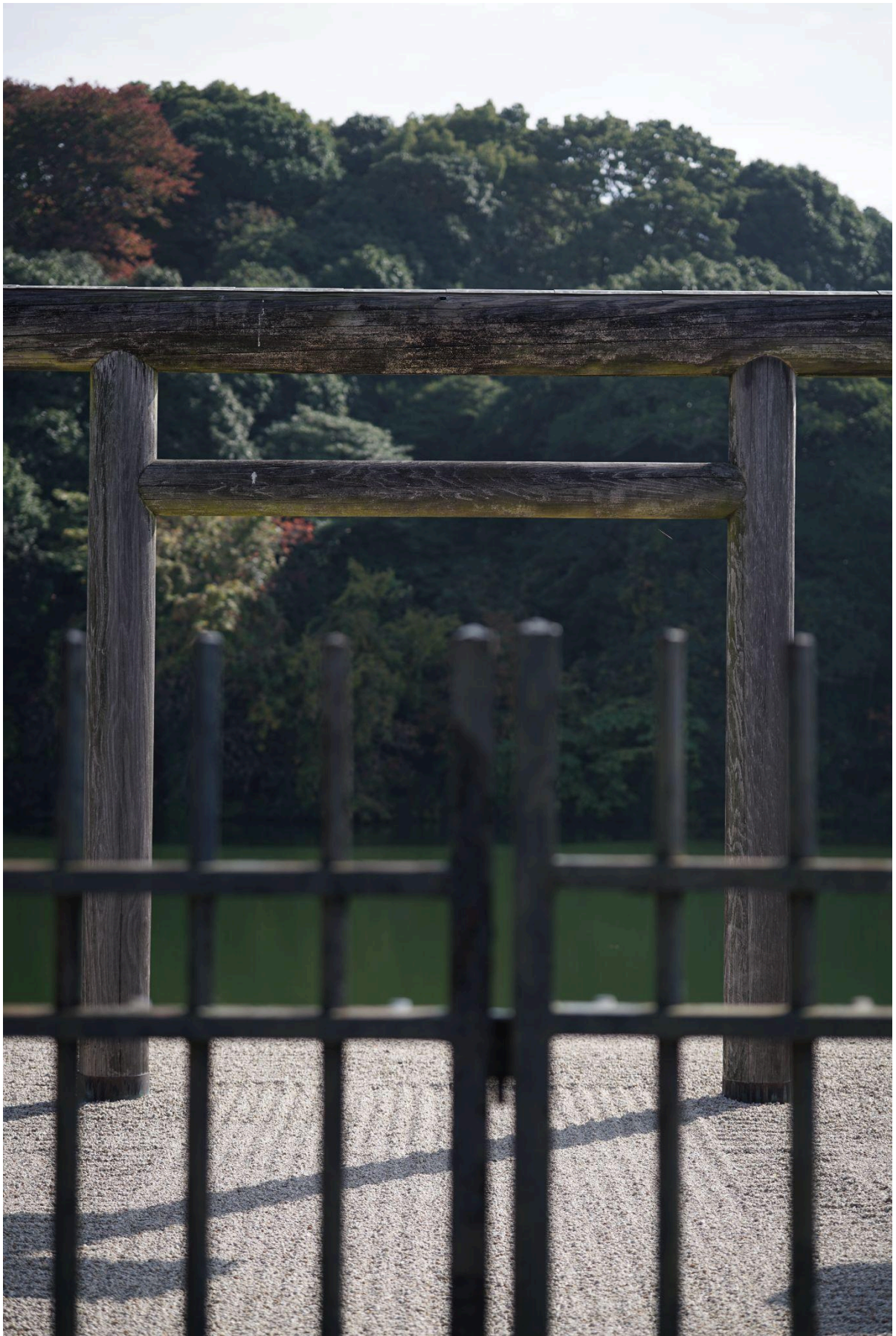
龍王山古墳群

箸墓古墳、渋谷向山古墳や行燈山古墳などの信仰を持続させるため、意識への振り付けとしての空間構成や演出がなされた古墳の方がやはり好きだなと思う。発掘された後、ただの丘と化した古墳はもはや機能としては死んでいて場所は消失していた。墓が死ぬってどういうことだろうか。いくつかみた中では、行燈山古墳が印象深く、参道から鳥居、そして池を挟んで古墳を望む、いくつかの境界を意識下で渡り、それを望む「わたし」とその先にある古墳を結びつける。その空間のあり用が清々しく、遠さの中に近さをはらむような感覚を覚える。

また、今日の夕方前に龍王山に入り、龍王山古墳群を探す。とにかく適当に山に分け入って、ひたすら探すもそれらしいものが見当たらず、どんどん勾配を登って山の中に入っていく。いつの間にか尾根に到着し尾根に沿ってガサガサ歩く。陽が下がり山の中は随分と暗くなっている。とにかくそれらしい窪み、大きな石、などを探しながら道のない山を進むと、それらしい穴。これかなあと思いつつ確証のないまましばらくぼうっと眺め下山する。電波も繋がらないのでどこにいるのか分からなくなるが、とにかく下る。入山してきた道らしき場所に到着し、周辺をうろうろ歩いていると、今度ははっきり、こりゃあ古墳でしょうという場所にたどり着く。古墳群というだけあって、いくつか点在しているらしいのだけど、随分と暗くなってしまったのでこれ以上は探さず文化村に戻る。

龍王山古墳群は、ほとんど管理されていないので、おそらくほとんどが山と同化してしまっていて、その見えなさが、山を踏みしめる足の感覚を敏感にさせる。自分が今立っているこの場所の下へ向かって感覚が広がってゆく感じ。そういえば初めて天理を訪れた時に、奈良に住む人は自分が住んでいるこの土地のさらに下への感覚ってどうなっているんだろうか、ということを話したことを思い出した。







行燈山古墳(2022.11.10)

2022.12.9

ブラックホールズ。穴かあ。穴と渡り。

渡った先で振り返ること。渡ってしまった。と、ハタと気づくこと。

彼岸から此岸を見返すこと。そしてまた戻ってくること。戻るとは引き返すのではなく、引き帰らずに進んで行った先に居場所があると感じられること。

いくつかの境界を渡り行きつ、行きつ、いつの間にか戻ってきている。

-

天理滞在中にいつの間にか浮かんできたいくつかのイメージはことごとく、関連性を持っていて、それはどうも信用できそうだと、公演に向けて整理をしつつ思っていますが、

2022.12.7

照明の高原さん、サウンドの荒木さんと劇場実験。想定した空間をインストールしていくつか試す。頭の中で考えていたことと、リアライズされたものを照らし合わせつつ、上手くいっている部分とっていない部分を確認する。









2022.12.5

「ここ」を照らしているわけではない光が反射して、たまたまこちらに届いている。そのような間接的な現れ。
直接ではないが確かにこちら側に影響している何か。
マスから個を掬う。個が全体に溶け入る。

2022.12.4

スタジオで寝ながら考える。
2001年宇宙の旅。インターステラー。映画の音声。
調光室のみの変化。ここではないが、確かに存在する、が、観測しようのない場所。
それらの中継。
信号に反応する光。
深夜、高速道路のトンネルを照らす照明。
誰も聞いていないラジオ。
人知れず起こる倒木。

2022.12.3

1週間ほど天理を離れ、京都に戻っていた。
京都で見た夢。
白く濁った水の広い池があり、その池の先にはコンクリートで固められたトンネルがある。池を渡ってそのトンネルに入る。池の水はそのままトンネルの中にも続いていて、内部は昼のように明るい。トンネルの中に入ると水の中からうっすらと大きな長い影が追ってきているのがわかる。その影を見ていると少しずつその影は浮上し姿をあらわす。龍だった。その龍は水面から跳ね再び水中へ消えてゆく。水面を見ながらトンネルの先を目指すとその先はコンクリートで固められた広いホールのようなプールで、そのプールで龍は幾度も跳ねては潜りを繰り返していた。龍が襲ってくる気配はなく、自分はその先に行きたいが、躊躇してその様子を見ていた。

-

タイトルは『ブラックホールズ』に決まった。

2022.11.27

演出ノート(追記)

1 | 幼い頃、わたしと二人の兄弟、父と母は5人で布団を並べて寝ていた。ある夜、ふと目覚めると父の姿も母の姿もなく、隣で兄弟が寝ているだけだった。怖くなったわたしは窓を開け、庭に向かって大声で両親を呼んだ。すると実家と隣接した寿司屋のおばちゃんが「二人とも店にいるよ」と教えてくれ、泣きながら寿司屋に向かったことがあった。かなり古い記憶だが、いまだにはっきりとあの日の不安感を覚え

ていて、それは自分が眠っている時間、別の誰かは起きて活動しており、眠るものはその時間に全く関与できないという、経験のズレの様なものがわたしを混乱させ、不安にさせていたように思う。

2 | 時間そのものを見ることはできない。わたしたちが時計を見る時、庭の植物の成長を見る時、すっかり暗くなった外の景色を見る時、そこには遅れて知覚される時間がある。過ぎた時間。「過ぎた」ことを自覚することによってわたしたちはようやく時間の変化に触れる。時間を忘れ、過ぎたことを自覚し、そしてまた忘れ・・・という反復によってわたしたちの生活が保たれている。

3 | 眠っているわたしを知覚することはできない。眠ることもまた、覚醒とともに「眠っていた」という過去形によってしか触れえない。眠ることは唯一「わたし」のみが経験し得ない。ただ、その眠るわたしを誰かがまなざしていることはありうるだろう。その時「わたし」と「あなた」は同じ空間にいながら別の場所に存在している。そしてあなたもまた眠りにつくだろう。

4 | フェリーに日をまたいで乗船していた。深夜、デッキに出るといくつかの光が遠くに見える。その光がなんの光なのか、ここからは遠くて窺い知れないが、光は船上にいるわたしに向かってまっすぐに届いている。そこに何かが存在しているということだ、と漠然と思った。そしてその光はわたしにとって無関係なものだった。意味の剥奪された存在の光が、足場すらおぼつかない海上のわたしにまっすぐに届いていた。

5 | わたしたちは常にどこからどこへ移動している。その視線は常に水平に向いている。星を見上げるとき、わたしたちの歩行は止まっている。見上げる、ということは立ち止まるということでもある。

6 | 船上から見える光の粒はどれもこれも同様に光の粒だった。車のライト、灯台の灯り、どこかの街灯、家々の窓、星々。それらの存在の光は私にとって全く無関係で、それゆえに等しく遠くの光であり続けた。足元は地上を離れている。揺れる船内で眠れぬまま朝を迎えた。

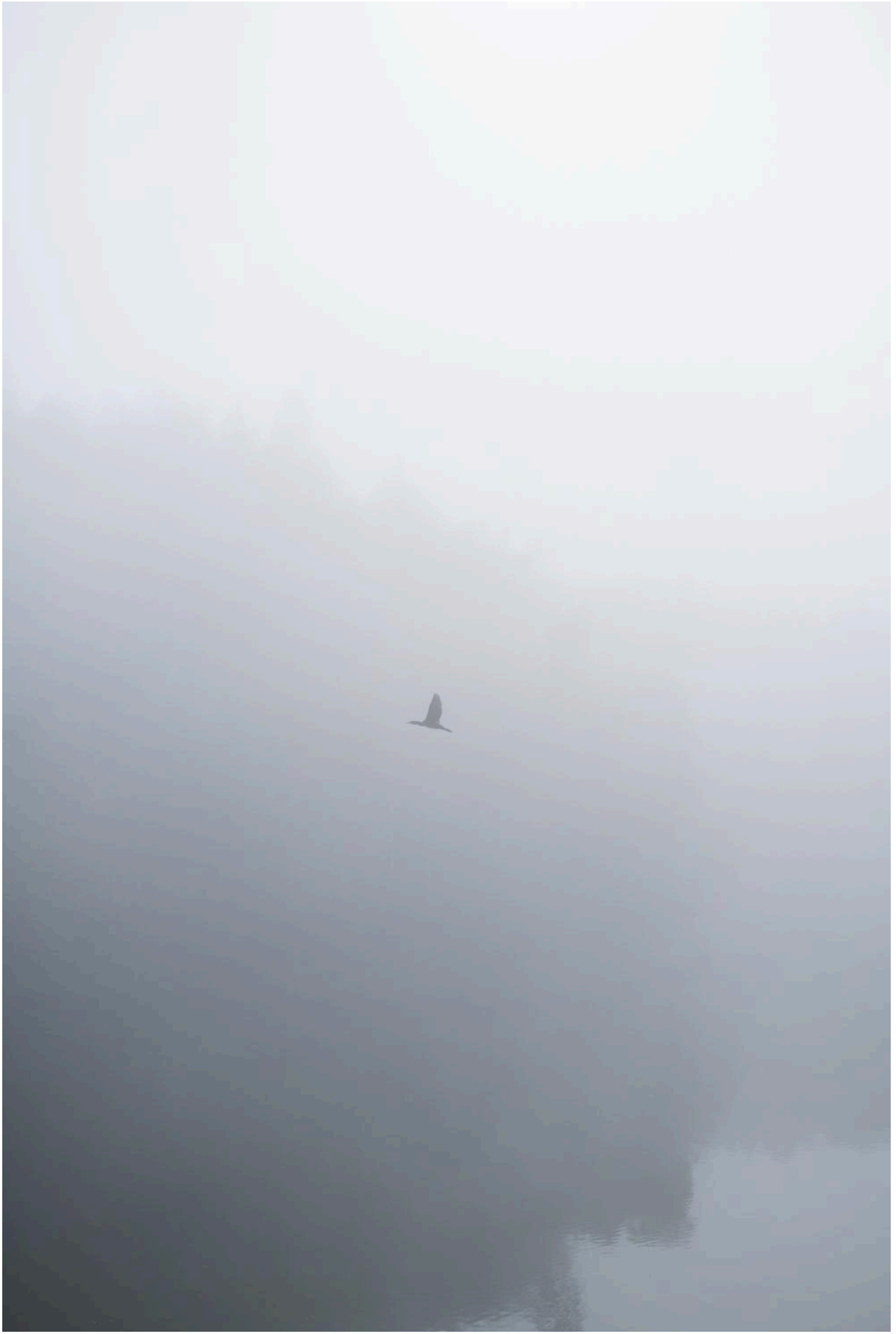
7 | キトラ古墳壁画は、ガラスの奥、薄暗い場所に置かれ、それを見る私とは全く別の時間に存在していた。その隔たり。考古遺物は発掘の瞬間から保存に向かう。保存とは時間を止めるということだ。以降、それらは自然光に触れることはないだろう。この時間の隔たりは停止された時間に存在する遺物と、流れる時間に身を置くわたしたちとの差であり、そこには半透明の隔たりがあった。

2022.11.23

複数形がよい

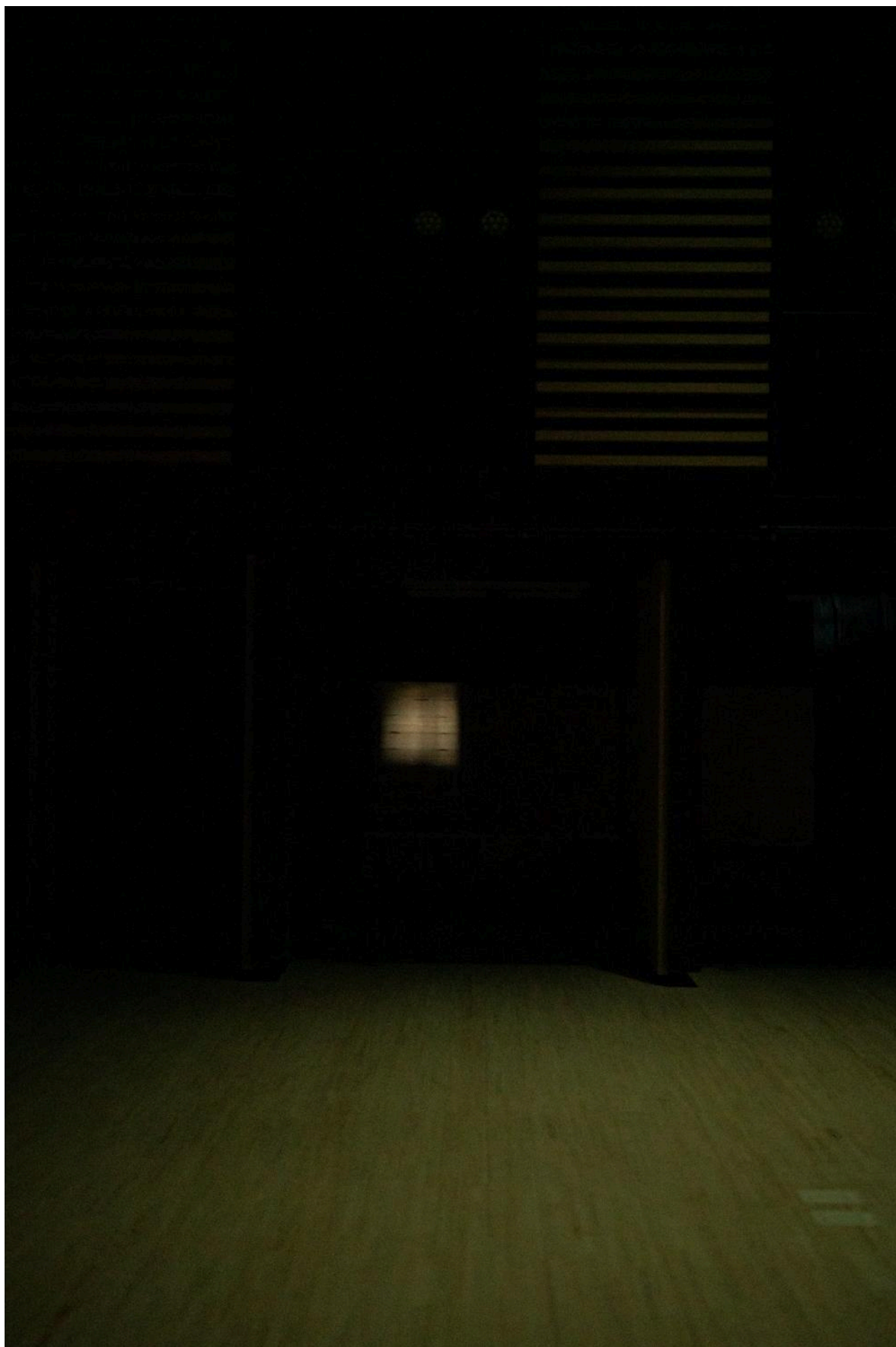
2022.11.22

今朝の天理は濃霧。霧を掻き分けスタッフチームが合流。











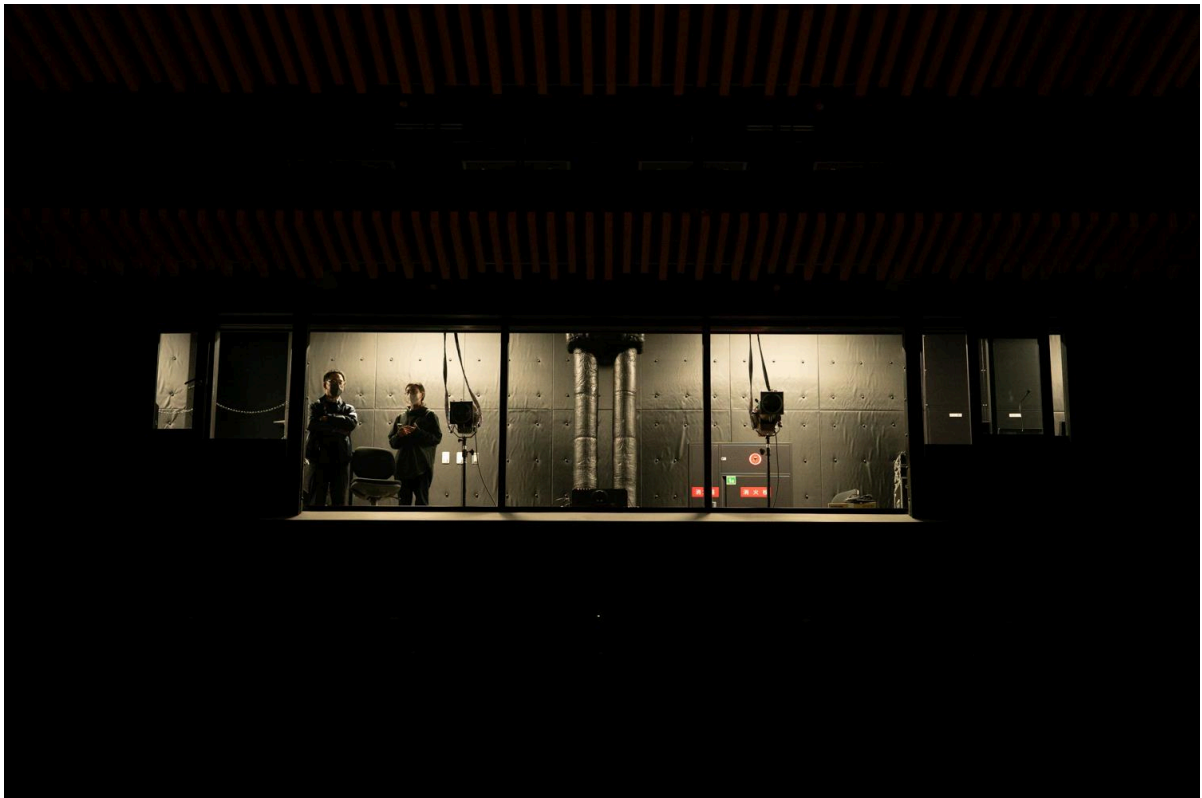




照明の高原さん、舞台監督の北方さん、サウンドの荒木さんのお三方。







2022.11.20

居場所がないと感じ、不安に苛まれている人は、つねに心身の深いところが損傷させられていると感じている。大切な何かが奪われているように感じている。(中略)心身の損傷は、脳の損傷だけでなく、その身体をとりまき支える居場所感にかかわる、より広がりのある出来事である。不安感の治癒においては、居場所感の回復もまた求められている。経験がたしかなこととして起こっていることが受けとめられ、確かめられるような場への信頼感の回復である。

—

人の気配を感じる。それも、不安と恐怖の発生源となるのではない気配を感じる。そうできるためには、人の気配が穏やかに漂うなか、そこに身を浸すことで、全面的に見放されているのではない、だから、たしかに生きていてよいと感じさせてくれる何ものかが生じていることが条件となる。

—

「他者を信じなければならないという強迫観念」の虚しさを主張したかった。(中略)この強迫観念が信じられているとき、私たちは、「固定した時間」「変化のない空間」を経験していることを理解しているからである。

—

『複数性のエコロジー』篠原雅武

2022.11.19(1:12am)



2022.11.18

ここ数日、上演に対して具体的かつ有用なことをいろいろ考えていて、作品制作のプロセスが目的に対して直線的な軌道を描き始めていて危ないなと思い始めている。少し迂回すべく「悲しみ」というものについて考えてみようと思う。

プロセスが有用性を是として線的に進み始めるとき、余分が否として切り捨てられ始める。「悲しみ」が迂回路になるかは分からないが、あるいは「悲しみ」が「眠り」と、どのように結びつくかわからないが、共に眠ることにまつわる悲しみと安堵の勝手な結びつきを期待する。



先日の朝、文化村の喫煙所でどこかの業者の人がレッドブルの500ml缶を飲んでいた。500mlとかあるんや。レッドブルは翼を授ける。

2022.11.17

京都の自宅からデスクトップPCその他諸々をスタジオに運ぶ。スタジオのマーキングが徐々に進む。たいそう居心地がよい。

コーヒーセットもフル。











誰も見ていない。全員が見ているが語りえない。共通しながら切断されること。個別であるが故に接続されること。

夜、粕汁 a.k.a. ポタージュ。

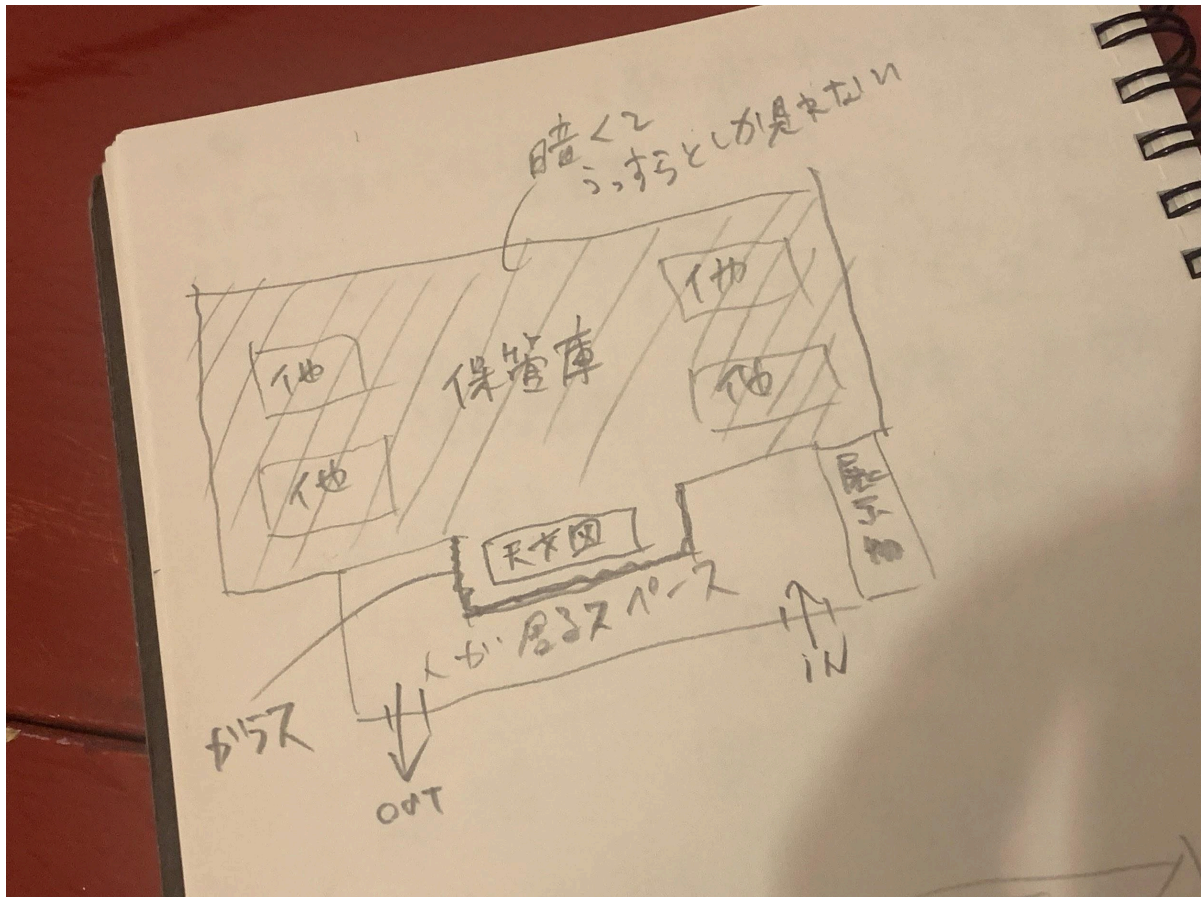


2022.11.16

11月10日に幾つか古墳を見に行く。目的はキトラ古墳の天井「天文図」公開を見に行く、だった。行く途中、行燈山古墳に寄る。丁寧に整備されていて良い場所だった。少し急な階段を登ると鳥居、その先に池、さらに奥に

古墳。視線が鳥居周辺の砂利の模様から誘われ、鳥居を抜け古墳に届く。視線の誘導が心地よく、古墳の遠さが意味を持って理解される。池の周辺を歩いたが、なんだか極楽のような風景でのんびり周回してしまった。

その後、キトラ古墳へ。キトラ古墳の公開は時間指定で10人程度が公開されている狭い部屋に通され、10分ほどの公開時間をその部屋の中で過ごす。ガラス越しに、火葬台のような台に乗った、石室から剥離された天文図が見える。展示スペースと保管庫が同居しており、人がいるスペースより広大なキトラ古墳の壁画の保管庫には、展示されている天文図のほか、奥の薄闇に東壁の青龍、南壁の朱雀、西壁の白虎、北壁の玄武の壁画(薄暗い上に遠いので確かかどうかは定かではない)が天文図と同じ火葬台のような台座に乗って安置(と言いたくなるくらいひっそりしてる)されているのが見える。



天文図そのものよりその公開の方式や展示の形態・環境の方に気を取られてしまった。古く価値のあるものや発掘されたものは、その瞬間からそのモノの時間を止める／遅らせる工作(保存)が施される。自然光(日光)はそのモノの劣化を早めてしまう(自然光が時間を進める)ため、そのモノは自然光から遠ざけられ、人工の光によって管理される。今後そのモノは自然光に当たることはない。

公開されている天文図のその奥の薄闇にひっそりとある、その他の壁画の存在が、天文図以上に迫ってくるものがあつた。

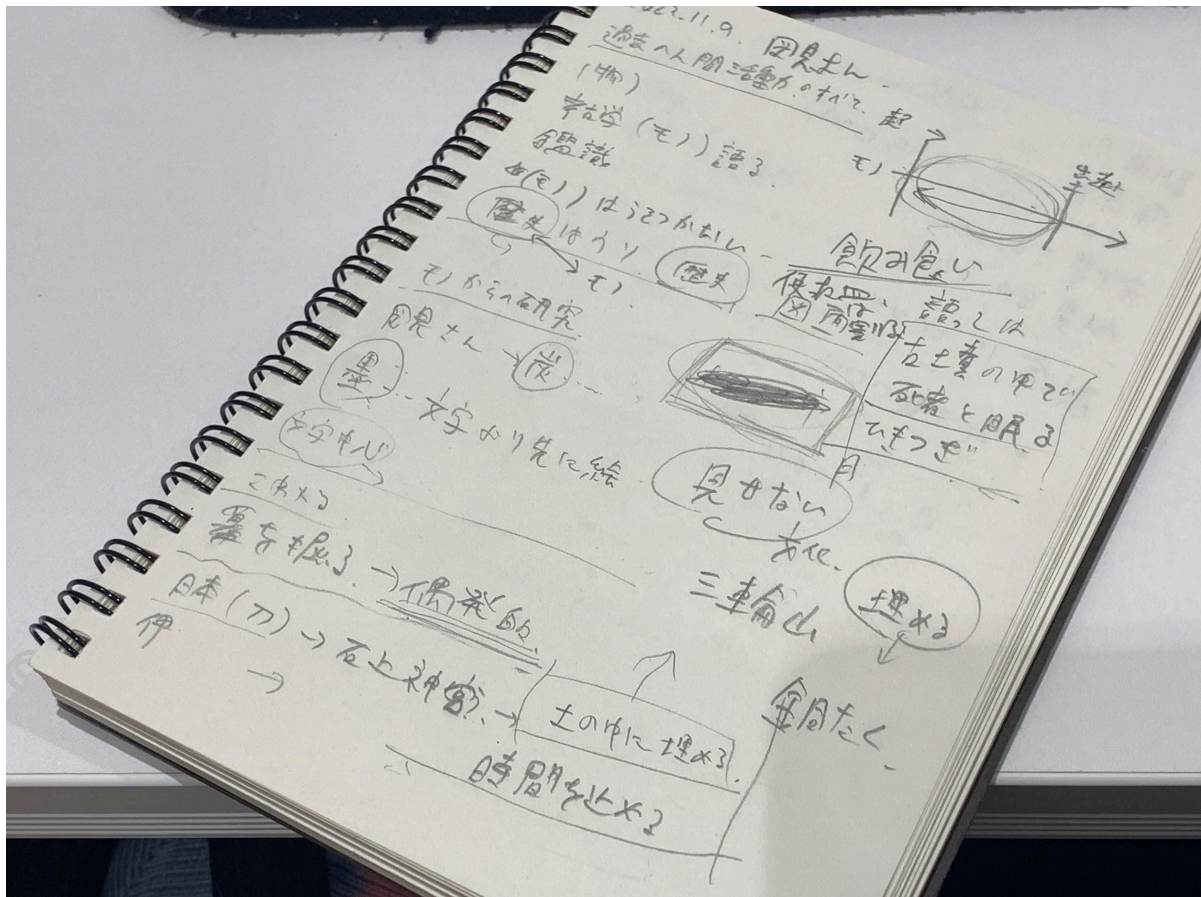
人工の光は時間を止める／遅らせる。

自然光は時間を進める。

(22:15中断)

レッドブルは翼を授ける。意識は昼に留まる。

2022.11.11(記述中)



9日は、なら歴史芸術文化村兼橿原考古学研究所の主任研究員である岡見さんと一時間ほどお話す。考古学とは「モノ」そのものに刻まれた情報を鑑識・分析・研究することによって過去の人間活動を解明することであり、歴史は嘘をつくが「モノ」は嘘をつかない。という話をされていて、印象的だった。歴史は常に「誰か」によって記述されるものであるし、「誰か」によって記述されるものである以上、そこには恣意的なものが紛れ込みもあるだろう。モノにはそういった事が起きえない。自然に出来上がったもの、人の手によって作られたもの、そういった偶発的であろうが作作的であろうが存在している「モノ」には何かしらの真実が刻まれている。だがそれらの「モノ」は自ら語りだすことはしない。みずから語りだすことをしないがゆえに「モノ」は嘘をつかない。「モノ」は真実を内に抱え、誰にも語ることなくその形の内奥に引きこもっている。

「モノ」が内に抱えている真実は主観をもつ人間という生き物には到底知ることができない類のものなのかもしれない。しかしそれら「モノ」を徹底して観察・分析することによって見えてくる歴史／過去の人間活動を更新し続けることが考古学の仕事なのかもしれないと岡見さんの話を聞きながら考えていた。

この歴史／真実のことを今、こうやって書きながら（現在19:29、文化村のスタジオ304でこれを書いている）、改めて考えていて「歴史は嘘をつく」というのは言い換えれば人は真実を知り得ないということでもあるかもしれないと思い返していた。真実を知り得ないがゆえに「わたし」たちは誤解や誤読といった過ちを犯す。それは主観を持ってしまった人間という生物の限界のようなものだろうか。「わたし」という単一の視点でしか世界を見ることができない存在。単一の視点がゆえに「わたし」は誤解・誤読する。そこに「わたし」という存在の限界がある。この「限界」を「可能性」として誤読することはできないだろうか。

(19:40／晩御飯とスタジオ退室のため中断)

2022.11.09

今日は、

2022.11.08

演出ノート

1 | 幼い頃、わたしと二人の兄弟、父と母は5人で布団を並べて寝ていた。ある夜、ふと目覚めると父の姿も母の姿もなく、隣で兄弟が寝ているだけだった。怖くなったわたしは窓を開け、庭に向かって大声で両親を呼んだ。すると実家と隣接した寿司屋のおばちゃんが「二人とも店にいるよ」と教えてくれ、泣きながら寿司屋に向かったことがあった。かなり古い記憶だが、いまだにはっきりとあの日の不安感を覚えていて、それは自分が眠っている時間、別の誰かは起きて活動しており、眠るものはその時間に全く関与できないという、経験のズレの様なものがわたしを混乱させ、不安にさせていたように思う。

2 | 時間そのものを見ることはできない。わたしたちが時計を見る時、庭の植物の成長を見る時、すっかり暗くなった外の景色を見る時、そこには遅れて知覚される時間がある。過ぎた時間。「過ぎた」ことを自覚することによってわたしたちはようやく時間の変化に触れる。時間を忘れ、過ぎたことを自覚し、そしてまた忘れ……という反復によってわたしたちの生活が保たれている。

3 | 眠っているわたしを知覚することはできない。眠ることもまた、覚醒とともに「眠っていた」という過去形によってしか触れえない。眠ることは唯一「わたし」のみが経験し得ない。ただ、その眠るわたしを誰かがまなざしていることはありうるだろう。その時「わたし」と「あなた」は同じ空間にしながら別の場所に存在している。そしてあなたもまた眠りにつくだろう。

4 | フェリーに日をまたいで乗船していた。深夜、デッキに出るといくつかの光が遠くに見える。その光がなんの光なのか、ここからは遠くて窺い知れないが、光は船上にいるわたしに向かってまっすぐに届いている。そこに何かが存在しているということだ、と漠然と思った。そしてその光はわたしにとって無関係なものだった。意味の剥奪された存在の光が、足場すらおぼつかない海上のわたしにまっすぐに届いていた。

5 | わたしたちは常にどこかからどこかへ移動している。その視線は常に水平に向いている。星を見上げるとき、わたしたちの歩行は止まっている。見上げる、ということは立ち止まるということでもある。

(18:13)



2022年10月31日から奈良滞在。そこからすこしづつメモを増やしてゆく。

遠くの光について考えている。そして睡眠。眠ること。

この二つはまだバラバラの場所に居て結びついていない、が、どこかで接地面があるような気がしていて、その接地面がどこにあるのか、考えている。